

## 龍善寺遺跡

— 上高津貝塚近くにある  
縄文時代中期の大きなムラ —



龍善寺遺跡の場所と出土した縄文土器



龍善寺遺跡は、桜川南岸、上高津貝塚から東南東に1.4 kmほど離れた中高津二丁目の、標高約27 mの台地上にある遺跡です。遺跡の周りの地形を概観すると、縄文時代、桜川の低地は海とつながっていた霞ヶ浦の一部で、上高津貝塚の周辺では、国道6号バイパス上高津交差点付近を基部とする大きな谷津が、西・南に向かって細かく枝分かれしながら伸びています。龍善寺遺跡はこの谷津の基部から見て南東約600 mの位置にあります。上高津貝塚も同じ基部から見れば西約900 mの位置にありますので、いわば上高津貝塚と龍善寺遺跡は似たような立地にあるということになります。

龍善寺遺跡は全体で約2ヘクタールの広さがある大きな遺跡ですが、住宅地建設に伴いこのうち約3500 m<sup>2</sup>が、平成15～16(2003～2004)年に発掘調査されました。その結果、ここには縄文時代・古墳時代にムラがつくられていたことが分かりました。特に今から約5000～4000年前の縄文時代中期には、確認できただけでも24軒の竪穴住居や、木の実などを貯蔵した大型の穴(土坑)292基などがつくられており、土坑総数1000基を超える大きなムラであったことが推定できます。ちなみに、上高津貝塚は今から約4000～3000年前の縄文時代後期・晩期に栄えたムラなので、龍善寺遺跡は上高津貝塚よりも早く、この地域に多くの人々が住んでいたことを示すムラということもできます。龍善寺遺跡から出土した資料を見ると、縄文土器は、関東

地方の縄文時代中期を代表する加曽利E式などの土器が多く見られます。石器の材料である黒曜石は、伊豆諸島の神津島から多く運ばれていたようです。また龍善寺遺跡には、上高津貝塚のような大きな貝塚はつくられてないものの、ウミナガがたくさん詰まった穴が発見されました。

しかし、上高津貝塚が栄える縄文時代後期になると、龍善寺遺跡からはムラがなくなってしまう。そして次に人々が住み始めるのは古墳時代で、今から約1700年前の3～4世紀に10軒、5世紀に2軒、6～7世紀に7軒の竪穴住居がつくられます。ただし、この頃には6号バイパスを挟んだ西側の上高津団地で発見された寄居遺跡、うぐいす平遺跡にもムラがつくられており、その後になると中心は寄居・うぐいす平遺跡に移っていったようです。このように、狭い地域でも、細かく見ると時代ごとに遺跡がつくられる場所に違いがあります。これは、その時代の自然環境や土地利用・生活方法の違いなどにより、人々が利用しやすい場所が微妙に異なるためと考えられます。

龍善寺遺跡の大半は現在でも住宅地の下に眠っており、その中の公園には遺跡の概要を示す説明板が設置されています。また上高津貝塚ふるさと歴史の広場(考古資料館)でも、5月末ごろまで龍善寺遺跡の出土資料を展示しています。この機会にぜひご覧ください。

☎上高津貝塚ふるさと歴史の広場(☎826・7111)